

◆リレー寄稿② ～震災半年を過ぎて



パルシステム福島
専務理事 安齊 雄司氏

全国の生協の皆さんの支援に感謝いたします。

パルシステム福島では、9月4日、復興祭を開催しました。震災発生時に支援物資を供給したいわきセンターを会場に、組合員のご家族約2,000人にご来場いただき、大盛況で元気付けが出来ました。

これまでの復興支援では、パルシステムグループ生協からの支援物資と、災害支援を専門とするNPO法人の継続した支援がありました。また、地元で献身的なボランティアリーダーがいて、ベースとなったいわきセンターとパルシステム物流のインフラがあり、これらが有機的に機能したことで、支援活動を推進できました。

家を失い、仕事を失い、故郷を失った被災者へ“希望の光”が必要です。「『何かできることをしたい』という、あの時の思いを忘れないぞ!」と行動を続けることが大切だと思っています。

浜北医療生協・福島の子どもをキャンプに招待

浜北医療生協（静岡県浜松市）では、「被災地を想うひまわりプロジェクト」を立ち上げ、長期にわたる支援活動を行なっています。その一環として、この夏、福島県の子どもたちを静岡県に招待し、2泊3日のサマーキャンプを2回開催しました（約150人が参加）。招かれたのは福島医療生協と福島中央市民医療生協、郡山医療生協の職員・組合員と子どもたち。

子どもたちは、照りつける8月の太陽をもとめせず、サッカーや野球などで体を動かしたり、小川で水を掛け合ったりしていました。小さな水路で「何かいないかな?」と生き物を探す子どもの姿も。

「子どもが外で遊んでいる姿を見るのは久しぶりです。アスレチックが楽しかったようですよ」（福島市から2人の息子さんと参加の高見欣也さん）

浜北医療生協の高瀬信之事務長は、「子どもたち

を安心して遊べる地域に連れ出すことで、現地の人たちの不安な気持ちをやわらげたい。『みんなで一緒に頑張っていく』という、地域を越えた絆をつくれれば、長い戦いもきっと乗り越えられる」と話します。費用も、組合員さんや地元の町内会の皆さんに寄付を募ったところ、予想以上の反響があったそうです。「心ある人は多い。『生協がこの地域にあってよかった』と思ってもらえる生協にしたいですね」（高瀬さん）



1日の行動予定や熱中症への注意伝達。



子どもたちの笑顔があふれ歓声が響く。

コープおおいた・福島の地で交流会開催



選果場での桃の試食。



福島のわらじ音頭を全員で。

コープおおいたでは、震災発生直後に16人が福島に入り、炊き出しや灯油搬送、店舗支援等を実施。その時現地入りした青木博範専務理事は、被害の甚大さと復旧に全力を尽くすコープふくしまの職員の熱意にうたれ、継続的な支援を決意。以来、物資提供など、コープふくしまとの密な連携のもとで、支援活動を続けています。

8月24～26日にはコープおおいたの職員や組合員、関連業者の皆さんなど37人が福島県を訪問。一行は桃の選果場や農場、沿岸部の被災地を視察し、24日の夜はコープふくしまの皆さんとの交流会が開かれました。「継続的な支援には、現状をしっかりと把握すること。福島の方から直接話を聞き、交流する機会を設けることが重要と考え、この交流会を企画しました」（青木専務）

交流会で信頼関係がさらに深まり、福島県産品の買い支え、大分県内での放射能勉強会の実施等が今後予定されています。翌日25日には、地元教育委員会から「足りていない」との情報を得ていた教室設置用の扇風機を相馬市に、義捐金を新地町に、さらに両市町に記念樹の苗と花の種を届けました。「今回の交流で互いに助け合うという生協の原点の大切さを感じました。顔を合わせ、長期的な支援につなげていくのは、まさに生協らしい支援だと思います」（コープおおいた・組合員参加者）